

親鸞仏教センター通信

2013.
March

2013年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第44号

廻世術と、おばあちゃんの知恵袋

親鸞仏教センター研究員 内記 洸

大型書店の一角だけでなく、駅の売店やコンビニなどのあらゆる「書籍コーナー」で、「自己啓発本」や「ハウツー本」と呼ばれる本が幅を利かせるようになったのは、一体いつごろからだろう。個々の身近な問題の解決から人生全般にわたる“生き方”的指南まで、それがどの程度の“how-to”を教えてくれるものなのはそれこそ千差万別であるようだが、これは一面、現代という時代が抱えている“生きづらさ”を反映しているのではないだろうか。大きく言えば、「どのように生きていったらよいのか」という、この基本的な問いに対する確たる“答え”を、私たちにはまだ見つけることができていないのである。

「一体、どのようにしていいたらよいのか」。この問い合わせは今日の“僧侶業界”でも盛んである。若手僧侶が既存の宗門体質、宗派意識を超えて、さまざまな活動をしているということをよく耳にするし、それ自体大変なことだとは思うが、しかし、そもそもこの“how-to”的追求は、本当に私たちの生活に潜む生きづらさを解決し、本当に私たちの要求を満たしてくれるものなのだろうか。むしろ、この“how-to”という構図自体に、何か根本的な“闇”が潜んでいないだろうか。先日、この葛藤を大学時代の恩師に訴える機会があったのだが、その際、次のような返事をいただいた。「何を語るにせよ、どのような活動をするにせよ、大切なのはそれがどこから起こっているか、ということでしょうね」と。

この「どこから」ということが実に難しい。例えば、純粹に世の幸せを祈って、あるいは人類の発展を願って生み出された技術であっても、それがわれわれにとって必ずしも“よい”結果をもたらすとは限らないということに、私たちは薄々気がついている。今日の社会における息苦しさを生み出してきたのは、何も悪意ばかりではないはずである。結果だけを求めるテクニック至上主義の空疎さは言うまでもないが、“善”を求め、しかもそれを「是」としてしまう私たちの志向性自体に、何か問題はないだろうか。自らの主体的実存的な「情熱」を引き受けて、親鸞はたとえば次のように詠う。「自力聖道の菩提心 こころもことばもおよばれず 常没流転の凡愚は いかでか發起せしむべき」(『真宗聖典』501頁、東本願寺出版部)。

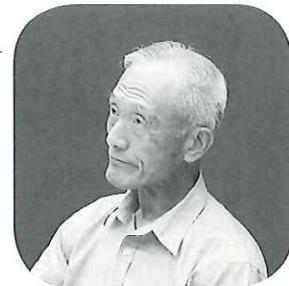
私たちが本当に求めているのは、現代的な“how-to”ではなく、いわば「おばあちゃんの知恵袋」である。足りないのは合理的なテクニックを直接知ることではなくて、私たち自身の存在を温かく包みこみ、生き方を伝えてくれる“おばあちゃん”的存在である。この問い合わせは切実であるが、求めて手に入るものでもない。当たり前のことだが、自分が自分の“現実”にもがいていくところからしか、出発のしようがないのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「淨土を求めさせたもの—『大無量寿經』を読む—」②

言葉が光の意味をもつ

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「淨土を求めさせたもの—『大無量寿經』を読む—」の第55～58回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第55回では「第二十七願から第三十願」について、第56回では「第三十一願と第三十二願」について、第57回では「第三十三願と第三十四願」について、第58回では「第三十四願と第三十五願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第54回から一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

迷いを切り開く力をもった言葉

第二十五願は、「國中菩薩」、國の中の菩薩は、「一切の智を演説すること能わざんば、正覺を取らじ」（『真宗聖典』19頁、東本願寺出版部）と。菩薩道において、菩薩が衆生を救うために仏陀の智慧の内容を説く。仏陀の智慧の内容を言葉にして語りかける。

言葉ということには、自分自身が自分のなかで独り言を言うといいますか、自分自身に自分を確認するような言葉と、それを外に、他の人に表現する言葉があります。言葉というものが、一つの言葉があるのではなくて、いつも自分のなかに自分を確認していくような言葉をもつ。

そもそも、思想家とか、もの書きというのは、ある意味で世間の付き合いに絶望した人なのでしょう。ものを書くということは、一人にならなければ書けません。話をしていたのでは書け

ません。だから付き合いに絶望するとか、あるいは、自分自身に絶望するとか、何かそういうことがものを考えたり書かせたりするのだと思うのです。宗教もそうだと思うのです。宗教を求めるということは、たすからないから求めるのであって、たすかっている人間は求める必要はないわけですから。罪とか苦惱とか、闇とか悪とか、何かそういう普通の世間でいえば否定概念、自分の立つ瀬がないというような苦しみがあって、宗教の言葉が身に浸みてくるわけで、そういうことなしに宗教を求めるということはありえない。

だから、煩惱の闇とか、そういう「闇」と言われる人間の暗さに対して、それを開くものは、何か開いた智慧をもった人の言葉なのです。言葉それ自身は別に闇とか光とかというような作用をもっているわけではないのでしょうけれども、ものの考え方を変えるような作用をするわけです。「ああ、そういうふうに考えることができるので」と気づかせる。だから言葉は自分の内に自分の考えをもう一度問い直し、自分で正しいと思ったり、自分でこういうものだと思っていたことが、そうではない、間違っていたのではないかと、そういうふうに自分のなかに問い合わせが起こって、閉鎖されていた考え方が開かれる。こういうことをもたらすときに、言葉が光の意味をもつわけです。

仏陀は沈黙から語り出した。語った言葉が、また人間を迷わしてもいるわけですが、それを本当に切り開く力をもった言葉、それをこの第二十五願は「一切の智を演説する」というかたちで与えようと言うのでしょうか。

これは逆に言えば、この濁世を生きている人間は、本当の言葉、正しい言葉を出せない。大体、意思が邪欲ですから。まあ、われわれ人間は、人との付き合いのなかで言葉を語ることが多いのですが、自分一人になって本当の言葉を自分に語れるかというと、そういうものでもないのです。自分の妄念のなかで自分を痛めつけたり、自分をおとしめたりする言葉を自分にぶつけて苦しんでいるわけです。そういう言葉ですから、他に対したときでもよい言葉になるはずがない。また相手を傷つけたり、侮蔑したり、そういう言葉になってしまふ。そういう言葉ではない、本当の智慧と智慧とが伝わっていく言葉を生み出せるような場所、この場所に触れて、互いに生きた言葉が取り交わせるようにしたいというのでしょうか。

■ 自分自身に自分で語りかける言葉

日本語表現というのは、言語学では場の表現だと、そういうふうに言われているらしいのです。場を汲んで表現が出てくるのが日本語の獨特な性格であると。だからヨーロッパ語などに比べると説明がとても少ない。それは、お互に場を生きていて、場が語っているものをお互いに汲み取りながら表現が出てくるからです。

ですから、これは悪い例ですが、「おーい、お茶」、「めし」、「風呂」、「ねる」とか、それだけで、ああ、疲れているのだなとか、そういうことが全部わかる。「おれは腹がへったから、そろそろめしにしてくれ」とか、いちいち言わなくてもよい。極端な場合、そのぐらい場があつて言葉が出る。場をもつてお互いに生きているという、そういう文化、これが日本文化の大きな力らしいのです。ヨーロッパやアメリカで、こうした場のもつている力を説明しようとすると、とても大変らしいのです。とにかくたくさん人の言葉を使わないと説明にならない、わかつてもらえない。しかし、現代という時代に、できるだけそれを他の文化圏にも発信するためには、面倒でも、いったんそれを、その論理を言語化しなければならない。言わず語らずでは伝

わらないのです。

確かに何か本当の感動は言葉を超えたものがある。しかし、いったん、それを何とか努力して言葉にしなければならない。言葉にするということが、特に非常に大事な時代になってきているのではないかと思うのです。

私なども、しゃべるのが大体苦手なのです。こうやってしゃべっているから、好きだと思われるかもしれませんけれど、誤解されるのです。しかし、苦手などと言っていられないで、何とか表現しようとして言葉を探している。結局、言葉というのは、自分自身に自分で語りかける言葉が大事で、それが、また人にも本当に伝わっていく。私は、そういうふうに言葉を使いたいと思っているので、自分にわかるよう、まず語っているのです。皆さん方にわかつてもらえるように、もちろん語らなければ意味がないのですが、第一義的には私自身にわかるうとして語っているのです。

自分のなかに芽生えてきたものを自分のなかに自覚化する言葉にして、それをまた表現していく。そういうことが、このごろ、だんだんと欠けてきている、どうも衰えてきているような気がするのです。一人ひとりが、自分のなかに言葉を確認して、それを表現することができる場を生み出していかなければならないのではないかと、そんなふうに思います。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

日 時：2013年3月7日(木)午後6時30分～9時

4月 休会

5月8日(木)午後6時30分～9時

場 所：有楽町・「東京国際フォーラム」G ブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

聴講料：無料（どなたでも聴講できます）

※座席数に限りがあります。（80席）

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp/>

ちの心のそしした不純粹さを照らし出すような、如來の心なのです。

「欲生我国」というのは、如來から差し向かれてはいる、この眞実の「至心信樂」の心をいただくことにおいて、「私の『國』に生まれようと思ひなさい」と言ふのです。誰もがみんな一緒に、と呼びかけられた世界に生きようというのですから、それは、「私」というモノサシによつて切り分けられた孤独な世界ではなく、自分の存在があらゆるいのちと共に通の大地に意味づけられているという、限りない喜びに開かれた世界なのです。

(訳・親鸞佛教センター)

原 文

◆ 信 樂
信 樂 といふは、如來の本願、眞実にましますを、ふたごころなくふかく信じてうたがわざれば、信 樂ともうすなり。この至心信 樂は、すなわち十方の衆生をしてわが眞実なる誓願を信 樂すべしとすすめたまえる御ちかいの至心信 樂なり。凡夫自力のこころにはあらず。

◆ 欲 生 我 国
欲生 我国 といふは、他力の至心信 樂のこころをもつて、安樂淨土にうまれんとおもえとなり。

■ 參 考

(貢はすべて『眞宗聖典』)

らをはげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり。

(五四一頁「一念多念文意」)

◆ 信 樂

この信 樂は、仏にならんとねがうともうすこころなり。この願作

◆ 欲 生
「欲生」と言ふは、すなわちこれ如來、諸有の群生を招喚したまうの勤めなり。すなわち眞実の信 樂をもつて欲生の体とするなり。誠にこれ、大小・凡聖・定散・自力の回向にあらず。かるが

◆ 信 樂

この信 樂は、すなわち度衆生心なり。この度衆生心ともうすは、すなわち衆生をして生死の大海上をわたすことろなり。この信 樂は、衆生をして無上涅槃にいたらしむる心なり。この心すなわち大菩提心なり。大慈大悲心なり。

(五五五頁「唯信鈔文意」)

◆ 安樂淨土
住持染とは、謂わくかの安樂淨土は、阿弥陀如來の本願力のために住持せられて、樂を受くるに間なきなり。

◆ 安樂淨土

「一心専念」と言ふは、「一心」は、金剛の信心なり。「専念」は、一向専修なり。一向は、余の善にうつらず、余の仏を念ぜず。専修は、本願のみなを、ふたごろなく、もっぱら修するなり。修

◆ 一 心 専 念

は、こころのさだまらぬをつくろいなし、おこなうなり。専は、もっぱらといふ、一といふなり。もっぱらといふは、余善・他仏にうつるこころなきをいうなり。(五四〇頁「一念多念文意」)

◆ 凡夫自力のこころ

自力といふは、わがみをたのみ、わがこころをたのむ、わがちか

私の一冊
(春近 敬)

『近代日本思想としての仏教史学』

オリオン・クラウタウ(法藏館)

「日本仏教は聖徳太子に始まり、鎌倉新仏教において頂点を極め、近世には堕落した。」このような理解は、比較的多くの人に共有されるところではないだろうか。本書は、これが近代の「官学アカデミズム」によって生み出された一つの歴史観に過ぎないことを明らかにした研究書である。

本書は、明治時代から戦後に至るまで仏教史を論じた数々の学者の言説を分析したものである。近代に前述のような言説を唱えた学者は、そのほとんどが帝國大学などに身を置く立場であると同時に、宗門に属する仏教者でもあつた。明治の官学を担つた仏教者は、日本仏教の起点に皇族である聖徳太子を据えることで「日本」という側面を満たした。そして、聖徳太子から白らの属する宗祖への展開を語ることで、宗門の立場を満足させた。平安仏教でも江戸仏教でもなく、鎌倉仏教がことに強調され、さら

に親鸞がその中心となつたのは、彼らの多くが真宗出身者(吉谷覺寿、村上専精、南条文雄、島地大等、高橋順次郎など)であつたことも関係しているという。また、いわゆる「近世仏教墮落論」は、近代の宗門改革の氣風のなかで、否定されるべき旧時代として江戸仏教の「衰微」が語られ、帰るべきは遠い過去である鎌倉時代に「隆盛」した仏教だ、という時代認識から生まれたものであった。

近年特に二〇〇〇年以降は近代仏教に関する研究が大幅に進められており、これまで何気なく受け入れてきた理解について再考を促されるような議論も生まれてきてている。本書もまた、そのような研究成果の一つであるといえる。

『聖典』の試訳（現代語化）

現代的な感覚からするとなかなか想像しづらいが、この「尊号真像銘文」が書かれた当時、大多数の人々は「文字」を読むことも書くこともできなかつたという。それはつまり、いくら親鸞が難解なお經の言葉を「かな」に表現し直すとも、それが民衆の心にきちんと伝わるかどうかはまったく別の問題だつたということである。それは民衆の日々の「ことば」に重なり、融け込むものでなければならなかつた。したがつて、この「第十八願の銘文」で、ただ「如來の誓いが眞実である」ということと「その眞実の誓いを信じなさい」ということが何度も何度も繰り返して、語られているのは、偶然ではないのである。

「眞実」や「信」といった言葉を聞くと、数年前の「今年一年の世相を表す漢字」に「偽」という文字が選ばれていたことを思い出す。世相としても私たちは今、「信じる」とことすらままならない身を生きている。しかし、親鸞によれば、「如來」は、もとよりそのままならない身の事実も含めて「信じなさい」と呼びかけてきているといふ。「信じること」の純粹さと「信じられない」という不純粹さは、読み書きが十分浸透していなかつた昔の時代であろうと、逆に言葉と記号の海で溺れかけている現代であろうと、何一つとして変わらないのである。違うのは、知識の量が相対的に激増したぶん、「自分を超えたもの」に対する関わり方——「信じる」ということ自体——が実感しづらくなってきているということだろうか。

(研究員
内記
光)

『尊号真像銘文』
試訳②

「信楽」というのも、自分自身の心を清く正しく保つて、信じることができるよう努力しなさい、などと言つてはいるのではありません。私たちに向けられた如来の願いが真実であるという、そのことひとつに、ああ、そのとおりだなあと、ただただ深くうなずける心の誓いとしてある「至心信楽」なのです。私たちの誰に対してもわけへだてなく、「眞実である、私のこの『誓願』を深く信じなさい」と勧めてくださつている如来の心ひとつを、そのままに信じる。それは、私たち自身の内にある自己中心的な心、いつも知らず知らずのうちに自分で自分を肯定してしまつていてるような心ではなく、むしろ逆に、私た

■	2	2012年
1	1	第20回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	親鸞聖人ご命日のつどい
1	1	第21回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第56回 (通算・第107回) 連続講座 「親鸞思想の解明」 (千代田区・東京国際フォーラム)
1	1	第31回 「教行信証」 真仏土・化身上巻研究会
1	1	第125回 沖沢研究会
1	1	第16回 英訳「教行信証」 研究会
1	1	第8回 研究員と読む公開輪読会「難信と悲願」
1	1	「教行信証」「化身上巻」を読む①(11/30)
1	1	②(12/7)③(12/14)④(12/21) (文京区・東京大
1	1	学仏青会館)
1	1	第22回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第42回 現代と親鸞の研究会「資本主義の歴史と文明の転換」経済学者・一般社団法人不識庵理事長、「不識塾」塾長・一菱UFJリサーチ & コンサルティング理事長・中谷誠氏 (文京区・東京ガーデンパレス)
1	1	親鸞聖人ご命日のつどい
1	1	第57回 (通算・第108回) 連続講座 「親鸞思想の解明」 (千代田区・東京国際フォーラム)
1	1	第17回 英訳「教行信証」 研究会
1	1	第23回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第32回 「教行信証」 真仏土・化身上巻研究会
1	1	親鸞聖教センター報恩講
1	1	第24回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	親鸞聖人ご命日のつどい
1	1	第8回 研究員と読む公開輪読会「信念」とは何か 「精神界」を読む①(1/11②1/18③1/25④1/2/1 (文京区・東京大学仏学会館)
1	1	第58回 (通算・第109回) 連続講座 「親鸞思想の解明」 (千代田区・東京国際フォーラム)
1	1	第43回 現代と親鸞の研究会「誰も知らない人の減少社会の意味」 株式会社リナックスカフェ代表取締役・平川克美氏 (千代田区・東京国際フォーラム)
1	1	第1回 清沢満之研究会
1	1	第33回 「教行信証」 真仏土・化身上巻研究会
1	1	第18回 英訳「教行信証」 研究会
1	1	第30回 「教行信証」 研究会
1	1	第29回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第23回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第22回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第21回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第20回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第19回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第18回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第17回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第16回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第15回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第14回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第13回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第12回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第11回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第10回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第9回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第8回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第7回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第6回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第5回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第4回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第3回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第2回 「尊号真像銘文」 研究会
1	1	第1回 「尊号真像銘文」 研究会
■	2	2013年

—現代と親鸞の研究会・第42回—

資本主義の歴史と文明の転換

経済学者・一般社団法人不識庵理事長・「不識塾」塾長
三菱UFJリサーチ&コンサルティング理事長

中 谷 嶽



中谷 嶽 氏

2012年12月4日、東京ガーデンパレス（文京区）において、経済学者で一般社団法人不識庵理事長、「不識塾」塾長、三菱UFJリサーチ&コンサルティング理事長である中谷巌氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。現在の資本主義社会が抱える問題点を歴史的な視点から鋭く分析し、さまざまな提言をされている中谷氏に、「資本主義の歴史と文明の転換」をテーマに語っていただいた。ここに、その一部を紹介する。（嘱託研究員 大谷一郎）

■ 資本主義とは

資本主義とは名前のとおり資本が主人公です。投資した資本に対する収益を最大にするように、個人や企業、政府が行動することによって経済発展が可能になるという理論です。資本の飽くなき自己増殖の欲求、つまり人間のもっている欲、できるだけ物質的に豊かになりたい、豊かな生活をしたいという欲望を一つの大いなテコにして眠っていた資源を開拓し、新しい技術を開発することによって生産性を引き上げ人々の生活を豊かにする。資本主義とはそういう仕組みだと考えてよいと思います。

■ 現在の先進資本主義国の現状

資本主義が発展するためには、宗教改革、市民革命による個人の解放や科学革命などいろいろな要因がありますが、そのなかでも一番重要なのはフロンティアの開拓、フロンティアの収奪ということです。具体的には、それは原材料、鉱物資源の支配権の確立というものですね。ですから、ヨーロッパ諸国は各国を植民地

化していくことによって、その支配権を獲得していました。そのことにより、好きな量を好きなときに植民地で採掘し、好きな値段で必要な先進国にそれを送り届けることができるようになりました。このような安い原材料の供給源として世界のフロンティアというものが活用されてきたということが、資本主義的発展の非常に大きなベースになっていると思います。

安い原材料を仕入れて工業製品化し、それを世界のマーケットに売っていくのですが、それは比較的独占的な力があるので高い値段で売れます。原材料を安い値段で買って、それを加工した工業製品は高い値段で世界に売るという、この価格差が余剰になるわけです。これを経済学では交易条件と言います。分母に輸入価格指数、分子に輸出価格指数、(輸出価格指数 ÷ 輸入価格指数)を交易条件と言いますが、当時はこれが非常に高かったのです。

ところが、第二次世界大戦終了後くらいからこれが着実に低下してきました。なぜかと言いますと、植民地主義が第二次世界大戦で終わり、各植民地国が独立し、それまで宗主国に支配されていた原材料や鉱物資源の支配権の奪還を狙いました。その最たるもののがOPECです。石油メジャーと言われるモービル、ブリティッシュ・ペトロリアム、ロイヤル・ダッチ・シェルなどという旧植民地宗主国がもっていた利権を産油国が取り戻すためにOPECを設立したのです。

1973年に第一次石油ショックが起こりますが、この当時の原油価格は1バレル3ドルでした。現時点（本研究会開催時）では約89ドル、一時は150ドルくらいにまで上がりました。いずれにしても3ドルと比べればとても高い価格です。つまり、石油ショックに至るまでは旧宗

主国が石油の利権を押さえていたために、相当安い値段で石油を買うことができましたが、この利権を手放さざるをえなくなったのが現在の状況です。このことは、実は石油だけの話ではなくて、鉄鉱石や石炭などほとんどすべての原材料が値上がりしました。宗主国の支配権が及ばなくなってきたのです。

つまり、先ほどの交易条件で言えば、分母にくる原材料価格が大幅に上がったのです。そして、世界がグローバル化して中国などが自由主義経済のなかに入ってきて、例えば、中国が作る工業製品価格は先進資本主義国が作る価格の5分の1で作れるようになり、交易条件の分子にくる工業製品の輸出価格が大幅に下がりました。つまり、輸入する原材料の価格が大幅に上がり、輸出する工業製品の価格は大幅に下がったのですから、先進国の交易条件は大きく切り下がるという状況になっています。

このことは、先進国がかつての植民地時代に、享受していた余剰というものを失ったということを意味します。実はこれが現在、欧米、日本という先進資本主義国の経済が長期的に低迷している根源的な構造的要因だと言えると思います。したがって、従来型のかたちではもう資本主義は行き詰まらざるをえないという状況に入ってきたということです。

■ これからの世界

現在、世界は、環境問題、格差の問題、高齢化、少子化問題等多くの問題を抱えていますが、その問題の根にあるものは非常に大きなものです。それはわれわれ一人ひとりの心の在り方、価値観そのものまで問われているということです。そのことを多くの人はわかり始め、感じ始めています。しかし、それが実際の日常の行動に反映されるまでには相当な距離があると言わざるをえないと思います。究極的には「足るを知る」というところまでいけるかということです。

紀元前5百年くらいにギリシャ文明が生まれ、また同時期に釈尊が誕生し、仏教、東洋思想が生まれました。私の理解するところ、ギリシャを中心とする西側の世界は自己の欲望というものを肯定し、それをどういうロジックで正当化し、実現させていくのかということを文明

の基軸においてきました。それが資本主義に結びつき、現在のような生活水準の上昇となって表れてきました。しかし今、それが限界にきているのです。そして紀元前5百年ごろから東洋でかたち作られてきた思想の体系とは、もともと自己の欲望を抑制することこそ豊かさにつながるのだという考え方があり、それは西洋の思想とは対極にあるものです。

このような対極にある思想がそれぞれ生まれ、とりあえずこの2500年間は、西洋の自己の欲望を肯定する考え方のもとに世界の歴史が継られてきました。それが行き詰まり、これから21世紀は東洋思想がようやく主役に躍り出る時代を考えることもできます。しかし、具体的にそれがどうしたら可能になるのかは非常に難しい問題です。 (文責：親鸞仏教センター)

※中谷 巍氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第27号（2013年12月1日号）に掲載予定です。

中谷 巍（なかたに いわお）経済学者・一般社団法人不識庵理事長・「不識塾」塾長・三菱UFJリサーチ&コンサルティング理事長

1942（昭和17）年大阪府生まれ。一橋大学経済学部卒業。1965～1971年日産自動車勤務。1973年ハーバード大学経済学博士（Ph.D.）を取得。同大学研究員、講師を勤めた後、1974年大阪大学経済学部助教授、1984年同教授。1991年一橋大学商学院教授に就任。1999年一橋大学教授を辞職後、同年9月多摩大学経営情報学科教授。2001年9月から2008年3月まで多摩大学学長。2008年同名誉学長。

1999～2005年ソニー株式会社取締役、2000年三和総合研究所（現三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社）理事長、2003～2005年6月ソニー取締役会議長。2010年一般社団法人「不識庵」を設立、同年5月より私塾「不識塾」開校。著書に、『資本主義以後の世界～日本は「文明の転換」を主導できるか』（徳間書店）、『日本の「復元力」—歴史を学ぶことは未来をつくること』（ダイヤモンド社）、『資本主義はなぜ自壊したのか 「日本」再生への提言』（集英社）、『入門マクロ経済学 第5版』（日本評論社）、『中谷巌の「プロになるならこれをやれ！」』（日本経済新聞社）など多数。



「現代と親鸞」の研究会（於：「東京ガーデンパレス」）

鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版のさらなる展開を願って

昨年の9月に、オックスフォード大学出版局から刊行された鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版は、その編集作業に並行して、当センターの常塚聰団員が中心となり、「鈴木大拙師訳『教行信証』の考究」と題して検討の場が設けられ、再日本語化が進められてきた（本誌第35号報告記事参照）。

このたびの改訂版刊行により、海外はもちろん、日本国内でも鈴木大拙師の翻訳、すなわちその思想を媒介として、親鸞聖人の教えに触れができるが、当センターでは、さらに、その一助となる試みとして、再日本語化（現代語訳）をするものである。

編集にあたっては、改訂版の編集過程で得た発見や成果を余すところなく活用し、遗漏なきよう取り組むためプロジェクトチームを結成して作業を進めている。そのプロジェクトチームには、チームリーダーとして、改訂版の編集にも携わっていただいた武田浩学氏（公益財団法人中村元東方研究所研究員、東京教区埼玉組真行寺住職）、メンバーの一人として高海史氏（元当センター研究員、東京教区埼玉組了善寺副住職）にご協力をいただき、常塚、ステファン・グレイス両団員と共に試訳作業の体制をとっている。

今回の作業にあたっては、読者対象は改訂版と同じく大学生、大学院生を想定し、①大拙の個性の尊重、②正確な英語理解、③日本語として美しいこと、を基本方針とし、大拙の“こだわり”を意識しつつ、師の思想性がより浸透した現代語となるように作業を行っている。

体裁や価格については未定だが、本年6月を目途に東本願寺出版部から刊行の予定。



親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

会員
募集中!

年会費1,000円（送料込）で、情報誌『アンジャリ』（年2回）と機関紙『親鸞仏教センター通信』（年4回）をご自宅にお届けします。ぜひ「アンジャリの会」にご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。また、バックナンバーのご希望も承ります。

■申し込みと問い合わせは、

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

まで。

あとがき

スマートフォンを使っている。通話やメールをはじめ、さまざまなアプリケーションで、便利で快適なツールとして利用可能だ。しかも自分の今いる位置を示してくれるナビゲーションの機能まである。しかし、いざバッテリーがなくなれば、時間すらわからない。そのときにはじめて、自動巻きの腕時計をみて、誤差がでているというのに安心する。デジタルに頼ってばかりで、アナログの大切さを忘れていた。3.11から2年、「忘れない」と言いつつ…（金石）▼「現代と親鸞の研究会」に中谷巖先生にお越しいただき、現在の経済情勢について、資本主義の歴史を追いつつお話しをいただいた。最後に、日本の現状のみならず世界の情勢を省みると、われわれ一人ひとりの心のありようが問われていると提起された。小手先の対策をするのではなく、自分の立っている場所を確認せよと叱咤されたように感じた。そして、本心で「足るを知る」ということ、他者の幸せを考えられるかが大切なだとご教示いただいた。「自利利他円満の願い」と言いながら、「罪悪深

重の身であるから」とどこか開き直っている。何か具体化したい。（大江）▼田舎の野菜は立派で大きい。しかし、「立派過ぎて規格外の野菜は売れない」と近所のおばちゃんが言っていた。確かにスーパーの野菜は大きさ・形がお行儀いい。田舎で見るものと様子が違う。なぜ？ それは私（消費者）が「ちょうどいい大きさで綺麗なもの」を求めるからだ。私の選択により「規格」が生まれ、「規格外」が生まれる。自分の周りだけ快適で、見えないところで切り捨てられるものに気づかない。自分さえよければ。この根性がさまざまなものを傷つけている。（鈴木）▼最近、私が聴いたラジオ番組で「成人とはいつから？」ということが話題になっていた。日本の法律では、十六歳で女性が結婚できるようになり、十八歳で自動車免許の取得や男性が結婚できるようになる。二十歳のときにフルスペックになり一人前の成人ということになる。では、あなたが考える成人はいつから？ 自分ひとりで生活できるようになったら成人？ 大切な人を守れるようになったら成人？ 成人してから今年で11年。はたして私は成人になったのだろうか？（三浦）